

方向認識の非対称性とことばの意味の拡張

—「まえ」を中心に—

楢和 千春

1 はじめに

「まえ」と「うしろ」は人間にとって等価値ではない。「まえ」は人間の視線が向かう方向であり、移動の方向であるという点において、「うしろ」に対し非対称的である。本稿¹の目的は、人間が自らの生物学的特徴に基づく根源的な経験から得た空間の概念を抽象的な概念の理解に利用していることが、ことばの意味の拡張においてどのような役割を果たしているかを考察することである。

人間は時間軸上に人間が未来を向いて存在しているという空間のメタファーで時間を理解している。先行研究では、大別して、人間が未来に向かって移動し時間はその移動の過程として過去から未来へ流れると認識される型と、人間が静止し時間が未来から過去へ流れると認識される型があるとされていた。

本稿では空間表現²におけるマエ³の分析を踏まえて、これらの時間認識の型が反映されている言語表現の分析を行う。そして、「まえ」という人間の生物学的特徴に基づく、「うしろ」に対して非対称的な方向認識が時間認識の型の動機づけとなっていることを明らかにし、より統合的な時間認識の型を提案する。

本稿ではさらに、空間表現でも時間表現でも用いられるマエとサキの用法の違いを、提案した時間認識の型と認知言語学のイメージスキーマ論とを組み合わせで説明する。空間表現では認知主体の前方しか指さないサキはマエとは異なり、時間表現では認知主体の後方（過去方向）も前方（未来方向）も指すことができる。この理由はサキに関わる長く細いもののイメージスキーマの「まえ」を、提案した時間認

¹本稿は筆者が1998年1月20日に京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した修士論文を要約し、書き改めたものである。

²空間を指示する表現や、ものものの空間における位置関係を述べる表現だけではなく、ものの部分を示す表現も含む。ものはその形状を限界として空間を占有している。そして、部分は全体に対してその位置を示している。

³概念は言語化しなければ表記することができない。従って、概念とその概念が言語に表われる形を区別しなければならない。本稿では、概念をひらがな（例 まえ）で表記し、概念が語彙として言語に表われた形をカタカナ（例 マエ）で表記する。

識の型における認知主体の「まえ」（未来方向）と時間の動きの「まえ」（過去方向）のどちらに重なるかによって、サキの指す方向が変わるためであると考えられる。

以上のようなマエとサキの考察を通して、「まえ」という「うしろ」に対して非対称的な方向認識がことばの空間的意味から時間的意味への拡張において重要な役割を果たしていることを指摘する。

2 空間表現におけるマエ

まず、空間表現に用いられるマエを手掛かりに、日本語の話者が「まえ」という空間概念をどのように認識しているかを考察する。

2.1 静的な位置関係を表わすマエ

2.1.1 認知主体の身体性と「まえ」

人間は自らの身体的特徴から獲得された基軸によって空間を認識している。人間の空間認知と言語理解に関する先行研究⁴においては、人間は自らの体の中心を座標の原点とし、原点を通る三つの基軸によって空間を認識しているとされている。しかし、日本語の日常的な発話の範囲において、「前後」の軸と「左右」の軸は等価値ではない。つぎの例が示すように、体の内部を前後に分割することはない。

- (1) 心臓は体の左にある。
- (2) *⁵腹筋は体のマエにある。

(1) と (2) でそれぞれ言及されている心臓や腹筋は体の内部にあって外側からは見えないという点で共通である。しかし、体内における位置を指示するときに「左右」は用いられるが「前後」は用いられないことをこれらの例文は示している。(1) は人間の身体的「左右」対称性によってその中心点を通る「左右」の境界面が容易に想起できる例であり、(2) は人間の身体的「前後」の非対称性によって「前後」の境界面が容易に想起できないために日常的な発話の範囲では用いられない例である。つぎの複合語の例も同様である。

⁴[Clark 1973], [Herskovits 1986]

⁵以下、* は日常的な発話の範囲では用いられない例文であることを示す。

(3) 上半身、下半身、左半身、右半身、*前半身、*後半身

「左右」と「前後」が人間にとって同じ価値を持たないのと同様に、「前後」という、対にして扱われる空間もまた人間にとって同じ価値を持たない。たとえば、体の表面は、いくつかの身体部位を表わす語によって分割されている。

(4) 顔、胸、腹、膝、すね、足の甲

(5) うなじ、背、尻、ふくらはぎ

(6) 頭のウシロ

医学的な専門用語ではなく日常的に使用される語彙の範囲で、体の「まえ」の表面は細かく分割され語彙化されているが、「うしろ」の表面はそれほど細かく語彙化されていない。また、「頭」は首から上の球状の部分全体を指しているが、その感覚器官の集中する「まえ」には「顔」という語彙がある。しかし、「うしろ」は(6)のように表現するほかない。本稿では、「まえ」と「うしろ」を「前後」として一括して取り扱うのではなく、より多くの注意や関心が払われていると思われる「まえ」を中心に考察を進める。

2.1.2 視界及び参照点と「まえ」

人間の体の「まえ」に、より多くの注意や関心が払われているのは、そこに人間の感覚器官、特に目があるからである。人間にとって「まえ」とは目で見ることのできる自身の体の表面であり、その体の表面に隣接して広がる空間であり、視界である。

しかし、一度「まえ」が空間を分割し認識する概念として確立されると、人間は「まえ」を空間における自分と他者との位置関係を認識するために用いるだけでなく、他者と他者との位置関係を認識するためにも用いた。

(7) 彼のマエにテーブルがある。

認知主体が(7)の発話を行うためには、この文が表わす状況が典型的には見えていなければならない。しかし、(7)のマエは認知主体の視界の一部を示すに過ぎない。認知主体の注意は視界の中の一部の空間に引き付けられていて、その部分的な

空間だけが言語表現に明示されていると考えられる。本稿では認知主体の視界の中で注意を引き付けられている部分的空間を指示するための基準となる地点、または、その場所を占めているものを参照点と呼ぶ。そして、参照点を介してその位置や方向を指示される場所、または、その場所を占めているものを指示点とする。(7)の発話において、認知主体は他者を参照点とし、そこから部分的な空間への方向を他者の体の「まえ」を利用して指示している。マエは部分的な空間を示すとともに、参照点からその空間への方向も示している。典型的には「A のマエ」というような言語表現で、A の位置に名詞が置かれている場合、参照点が明示的であるという。

認知主体と参照点との関係は二つの場合⁶が考えられる。第一に、形状や機能によって、参照点となるもの自体に慣習的に内在する⁷とみなされる「まえ」がある場合。

(8) 家のマエにねこがいる。

(9) テレビのマエに座る。

第二に、参照点となるものに、内在するとみなされる「まえ」がない場合。たとえば、木やボール、箱などは、常に「まえ」として認識される特定の面を持たない。しかし、形状や機能によって内在するとみなされる「まえ」がないものでも、参照点となることができる。

(10) 木のマエにねこがいる。

(11) ボールのマエに釘が落ちている。

(12) 箱のマエにペンがある。

(10) から (12) の例では、発話者はものと向い合い、ものが自分に向けている面を「まえ」であるとみなしている。即ち、参照点となるものに内在するとみなされる「まえ」がないにもかかわらず、発話者は自分と参照点となるものがどのような位置関係にあるかという状況に依存して、ものの特定の面を「まえ」であると認識する。以後このような認識を「まえ」を投影する⁸という。

⁶ 「まえ」がどのように方向づけられるかについては、[Fillmore 1982, pp. 39–42], [Hill 1978], [Hill 1982] を参照。

⁷ 「内在する」と言っても、人間の認識から独立して存在するわけではない。たとえば「家のマエ」が玄関のある面である必然性はない。ある言語を用いる集団の中でそのような共通の認識がなされているに過ぎない。

⁸ 発話者から見てどの方向に「まえ」が投影されるかは文化によって異なる。[Hill 1978], [Hill 1982]

2.2 動的な位置関係を表わすマエ

2.2.1 移動する主体の「まえ」と方向認識の非対称性

人間は足を用いて移動するとき、体の形状のために常に「まえ」に動く。目的地を定めてそこへ到達しようという意志を持って移動する場合、人間は常にというよりはむしろ選択の余地なく「まえ」に動く。従って、つぎの (13) の人間が移動する様態を表わす動詞にマエを共に用いて方向を示す必要はない。これに対し「左右」や「うしろ」に移動する場合は、(14) や (15) のように方向を表わす語を共に用いるか、(16) のように形態的に方向を明示しなければならない。

(13) 歩く、走る、進む。

(14) [左／右／横] に跳ぶ。

(15) ウシロへ下がる。

(16) 後ずさりする。

「左右」の軸が移動の方向に関して中立的であるのに対し、「前後」の軸は明らかに移動の方向に関して一方に傾きがあり、「前後」を一括して取り扱うことは適切ではない。「まえ」は人間の移動と密接に結びついた特別な価値が置かれるという点で「左右」や「うしろ」とは異なっている。本稿では、後述するように、この「前後」の軸の方向認識の非対称性が語の意味の拡張において重要な役割を果たしていると考えられる。

2.2.2 移動する参照点と「まえ」

「まえ」は移動の方向と密接に結びついているので、形状や機能によって内在するとみなされる「まえ」を持たないような参照点であっても、その進行方向が「まえ」であると認識される。

(17) 転がる岩のマエに人がいる。

では、英語と Hausa 語を比較し、英語ではものの発話者に向かっている面に「まえ」が投影されるのに対し、Hausa 語では発話者に向かっていない反対の面に「まえ」が投影されると述べられている。即ち、参照点となるものは発話者に向かい合っているのではなく、発話者と同じ方向を向いているのだと認識されている。

3 時間的な意味へ拡張するマエ

人間は時間を線としてとらえ、その線上を未来に向いて進んでいくのだという強い認識を持っている。即ち、人間は時間を空間移動のメタファーによって理解している。しかし、言語表現には、時間軸の未来方向を「まえ」とする時間認識の型に基づくものと、時間軸の過去方向を「まえ」とする時間認識の型に基づくものがある。ここでは、第2節における考察を踏まえ、より統合的な時間認識の型を提案する。

3.1 空間移動のメタファーによる時間認識

つぎの(18)のような時間表現は、人間が空間において行っている「まえ」の方向づけを、抽象的な概念である時間軸上でも行っていることを示している。時間軸のどちらの向きに「まえ」が方向づけられるかを理解することによって初めて言語表現の意味を把握することができる。これは、「前後」の軸の方向認識の非対称性が、語が空間表現から時間表現に拡張されて用いられることを可能にしていることを示している。空間表現で非対称的な方向概念を内在させる語⁹が、本来、方向性を持たない時間軸上に位置づけられて時間に方向が与えられている。

(18) 入試の二日マエにおなかをこわした。

先行研究によれば、人間は抽象的な概念を具体的な概念のメタファーによって理解している。時間の概念は空間移動のメタファーによって理解される場合がある。即ち、未来の方向を向いて時間軸上にいる認知主体が出来事を順に経験するというメタファーである。その下位範疇に時間が動いて人間が静止していると認識される場合と、時間が静止して人間が動くとして認識される場合があるとされている¹⁰。時間が動く場合は、時間は未来から過去へと動き、その進行方向に「まえ」が方向づけられる。一方、人間が動く場合は、人間は未来を向いて時間軸上を進み、人間の進行方向に「まえ」が方向づけられる。本稿では、この二つの時間認識の型をそれぞれ時間移動型、主体移動型と呼ぶ。

⁹ マエだけではなく、後で考察するサキも含まれる。

¹⁰ [Clark 1973, pp. 48-52], [Lakoff 1980, pp. 41-44], [Lakoff 1993, pp. 216-219], [山梨 1995, pp. 49-51, 114-117]

- (19) ちびちゃんの三回目の誕生日がやって来る。
- (20) 春がそこまで来ている。
- (21) 過ぎ去った日々はもう戻らない。
- (22) 行く年、来る年、去年、来年、先年、前年、先月、先週、前月
前週、来月、来週、過去、未来

(19) から (22) の例は未来が時間軸上にいる人間に向かって近づいてくるという時間移動型の認識に基づいている。時間軸上の人間がいる地点を通り過ぎてしまった時間は過去となる。即ち、時間は未来から過去へ向かって動いていると認識され、時間の動きの向きに「まえ」が方向づけられる。そして (23) のように、時間軸上で、ある時点を参照点とし参照点の「まえ」を用いて別の時点を指示するとき、指示点は参照点から見て過去方向にある。

- (23) 入試の二日マエにおなかをこわした。[=(18)]

つぎの例は主体移動型の認識に基づいている。

- (24) 来し方、行く末、先行き
- (25) きみのマエにばら色の未来が待っている。

上にあげた先行研究では、時間移動型も主体移動型も、時間軸上に未来を向いて認知主体が存在しているという一つのメタファーの下位範疇であると考えられている。これらの時間認識は共通のメタファーに基づいてはいるが時間の動きの方向を「まえ」とする場合と、認知主体の移動する方向を「まえ」とする場合があるのだと並列されている。また、先行研究では時間の動きの「まえ」方向が過去方向である理由については説明されていない。

先行研究としては他に [渡辺 1995], [Koschmieder 1935]¹¹ があり、上記の二つの型の他に、認知主体が時間の動きと同方向へ動き、時間の動きは認知主体が出来事を経験して行く過程として過去から未来へ動くとする型を提示している。これについては後で述べる。

¹¹Koschmieder の説については [山田 1984, pp. 23-24] を参照。

3.2 認知主体の移動とマエの空間的意味の変化

空間移動のメタファーとしての時間認識について考える前に、予備的考察として、認知主体が移動し目標物をつぎつぎに通過して行くという動的な要素が加わった場合のマエについて考えてみよう。

(26) マエの駅で降りるはずだったが、寝過ごした。

(26) のマエは発話者が移動する方向としての「まえ」を意味していない。参照点は発話者ではなく、発話時において発話者がいる駅である。しかし、このような場合のマエは発話者の現在の位置に依存しない。

(27) 桜木町のマエの駅で降りるつもりだ。

(28) 桜木町のマエの駅で降りるはずだったが、寝過ごした。

参照点の「まえ」の方向づけには、空間表現では大別して三つの場合があった。第一に、ものに形状や機能によって内在するとみなされる「まえ」がある場合。しかし、「駅」には形状や機能により内在するとみなされるような「まえ」がない¹²。

第二に、認知主体が参照点を自分に向かい合っていると認識する場合があった。この場合、参照点が認知主体に向けている面に「まえ」が方向づけられた。(28) のように参照点が発話者の進行方向である前方の空間にあるとき、参照点が発話者に向かい合っていると認識がなされているとみることも可能である。しかし、(29) では参照点となる駅はすでに発話者の後方にある。

第三に、動きの進行方向に「まえ」が方向づけられる場合があった。しかし、参照点となる駅は動かない。動いているのは発話者である。認知主体は進行方向にある目標物に自ら移動して近づいていく。人間の日常的な空間移動の経験では、そのようなときに目標物があたかも動いて認知主体の方へ近づいてくるように感じられることがある。この主観的知覚は言語にも表われている。[山梨 1995, p. 212] では認知主体の移動による主観的知覚が反映されている表現としてつぎの例があげられている。

(29) 山々の明るいのは下田の海が近づいたからだだった。(川端康成『伊豆の踊り子』: p.34)

¹² 「駅マエ」というように、駅を建物として静的に外側から見る場合を除く。

続けると、認知主体は目標物とすれ違って離れていく。このとき、あたかも目標物が認知主体に背を向けて、遠ざかっていくような見かけ上の動きが感じられる。

このような認識には認知主体が自らの「まえ」へ直線的に移動することと、そして典型的にはその移動の線上に認知主体が通過していく目標物が存在していることが必要である。認知主体が横の方向へ直線的に移動するならば、目標物の見かけ上の動きは認知主体の移動の方向によって、右から左へあるいは左から右へと知覚されるだろう。この場合、移動という観点から左方向と右方向は対称的であって、常にどちらか片方の方向へ移動するというわけではない。これに対して「前後」においては人間の生物学的特徴から、常に「まえ」が移動の方向となる。この直線上を常に「まえ」に移動していくという認知主体の空間における日常的な経験は、空間移動のメタファーを通して、時間という一次元の線として認識され過去の時間に戻ることができないという方向性において非対称的な抽象概念の理解に用いられる。

3.3 空間移動のメタファーの再検討

本稿では先行研究と同様に、「時間軸上に未来を向いて存在している認知主体」という空間のメタファーによって時間という抽象概念が理解されていると考える。人間は日常的な空間移動の経験から、自らの移動の方向と未来とを強く結びつけていると思われる。人間の生物学的特徴のために人間は常に自らの「まえ」に移動し、また、「まえ」にある目標物に到達するのは未来のことである。従って、空間移動のメタファーによる時間認識においても、認知主体は自らの「まえ」にある未来に向かって移動しているという感覚を常に持っている。この認知主体の移動の感覚が時間軸上に配置された目標物である出来事または時点が自分に向かって動いてくるといふ、見かけ上の動きを生む。そして、認知主体が視点をどこに置くか、即ち、参照点として自分自身を選ぶか、または、時間軸上の任意の時点（認知主体のいる時点を含めて）を選ぶかによって言語表現における「まえ」の方向づけが変わる。時間表現においてマエは常に時間軸上の任意の時点を参照点とする表現に用いられる。

参照点となる時点が時間軸上において認知主体の位置よりも未来方向にあるとき、参照点は認知主体に対して向かい合っていると認識される。従って、マエは参照点

が認知主体に向けている面の方向、即ち、過去方向¹³を意味する。

(31) 結婚するマエに子どもが生まれます。

(32) 食事のマエに梅酒を飲む。

時間軸上において参照点と認知主体の位置が重なると、参照点が時間の見かけ上の動きの方向（過去方向）によって指示する時点は常に認知主体の後方、即ち、過去となる。

(33) あなたには、マエにお目にかかったことがありますね。

(34) 本日1月20日よりマエに結ばれた契約は無効です。

見かけ上の動きによって認知主体に「まえ」を向けて近づいてきた参照点は、時間軸上のある時点において認知主体のいる時点と重なった後、認知主体に背を向けて（即ち、参照点の「まえ」方向は変わらないまま）時間軸の過去方向に遠ざかっていくと認識される。

(35) 入試のマエの日に大雪が降った。

(36) 地震のマエの晩、奇妙な現象が観察された。

(35) と (36) で、参照点である「入試」や「地震」という出来事が起きた時点は発話者がすでに通過した時点であり、時間軸上で発話者の後方にある。ここで、もし、発話者の「うしろ」という方向が参照点に投影されて指示点への方向が指示されるならば、(35) と (36) が表わす状況はそれぞれ、つぎのように表現される。

(37) *入試のアトの日に大雪が降った。

(38) *地震のアトの晩、奇妙な現象が観察された。

しかし、日本語¹⁴では、(37) と (38) で、参照点である「入試」や「地震」が指示点よりも時間軸上でより過去方向の時点で起きた出来事であると解釈することはできない。

¹³参照点から見て過去方向の時点を示しているものであり、過去時制とは異なる。

¹⁴ロシア語では過去時への方向を示すときに発話者の「うしろ」が投影される。日本語で「2年マエに」は、ロシア語では時間を表わす語の対格の後へ「ウシロへ」を意味する副詞を置いて表わされる（山口 巖教授のご教示による）。この副詞の使用が過去時について言及する場合に限定されていることは、日本語とは異なり発話者自身が参照点になっている可能性を示唆し、興味深い。

つぎに、認知主体が時間軸上で過去方向を「振り返る」ことができると仮定してみよう。空間では、振り返って視線だけを後ろに向けるとき、認知主体の後方にある参照点の指す「まえ」の方向は、認知主体の前方にある参照点の指す「まえ」の方向とは逆になる。しかし、時間軸上では、認知主体の後方にある参照点の「まえ」は認知主体の前方にある参照点の「まえ」と常に同じ方向（過去方向）を指す。

- (39) センター試験のマエの日は大雪が降った。
- (40) 卒業式のマエの晩、追い出しコンパがあった。
- (41) センター試験のマエの日は大雪が降るだろう。
- (42) 卒業式のマエの晩、追い出しコンパがある。

このことは、認知主体が常に未来に向かって移動しているという感覚と、そこから生まれる時間の見かけ上の動きが日本語の話者の時間認識において重要であることを示唆している。見かけ上の動きによって前方から認知主体に「まえ」を向けて近づいてきた参照点は、時間軸上のある時点において認知主体のいる時点と重なった後は認知主体に「うしろ」を向けて遠ざかっていくと認識される。従って、マエが示す方向は一貫して見かけ上の時間の動きの方向（過去方向）であり、参照点が認知主体に向けている「うしろ」の方向（未来方向）はアトで示される。

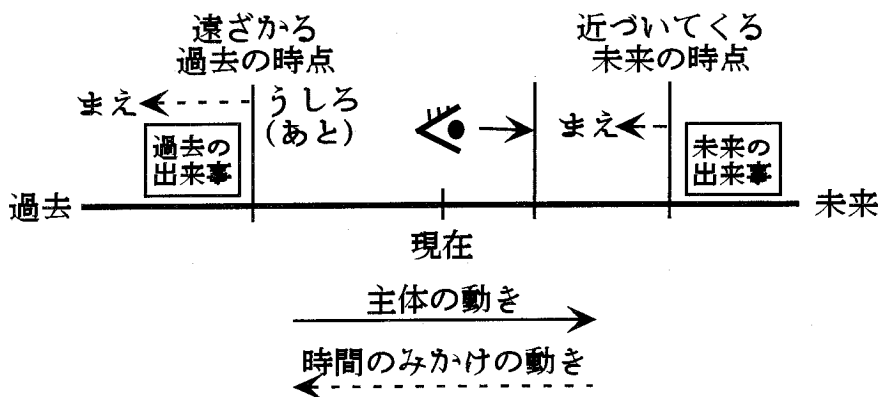


図 2: 本稿で提案する統合化された時間認識の型

3.3.1 川の流れのメタファー

3.1 で保留しておいた、認知主体が時間の動きと同方向へ移動し、時間の動きは認知主体が出来事を経験して行く過程として過去から未来へ動くとして認識される型について考える。時間が過去方向から未来方向へ動くという時間認識は確かに言語表現に表われている。

(43) 幕末の世から時は流れて明治になると…

(44) 時をさかのぼること千年の昔

これらの例は時間の動きを川の流れにたとえて、上流に過去を、下流に未来を方向づけている。本稿ではこの型の時間認識を「川の流れのメタファー」と呼ぶ。川の流れのメタファーを時間が過去から未来へと動く型の時間認識であるとするならば、前節で提示した時間認識の型に合わない。しかし、認知主体が自らの移動の方向を川の流れというメタファーを通して時間の動きの方向に重ねていると見ることできる。その場合は主体移動型の時間認識の変形としてとらえることができる。

4 サキと「まえ」

第4節では、「まえ」という概念を内在させるサキを取り上げる¹⁵。サキはマエと同様に空間表現でも時間表現でも用いられる語である。マエもサキも空間表現では認知主体の前方を指す。しかし、時間表現ではマエが過去方向だけを指すのに対し、サキは未来方向も過去方向も指すことができる。「まえ」という概念を内在させながら、マエとは異なるサキの用法を、時間認識の型とサキという語に関わる細く長いもののイメージスキーマの方向性を関連させて説明する。

4.1 過去と未来の両方向を示すサキ

サキは空間表現では典型的につぎのように用いられる。

(45) 郵便局は銀行のサキにあります。

(46) 500メートルサキ、工事中

¹⁵第4節は[檜和 1997]を書き改めたものである。

(47) この道はサキで左にカーブしている。

いずれも、参照点から見て前方を意味している。空間表現でサキが後方を意味することはない。つぎにサキの時間表現の例をあげる。

(48) サキが短い。

(49) 結婚はサキの話だ。

(50) サキで苦労するよ。

(51) 500 年サキの世界

上の例でサキは発話時から見て未来を指している。一方、つぎの例でサキは発話時から見て過去を指している。

(52) サキの大戦

(53) サキにお伝えしたように、遠足は中止になりました。

(54) サキほど、田中さんから電話がありました。

4.2 サキの空間的意味から時間的意味への拡張と「まえ」

4.2.1 サキのイメージスキーマ

サキはものの形状の一部を意味する。英語では、ペンなどの尖った先端は ‘point’、ステッキの石突きやビリヤードのキューの端は ‘tip’、棒などの端は ‘end’ となる。これらの英単語のすべてに日本語ではサキ一語で対応することができる。‘point’ や ‘tip’ が先端だけに注目している表現であるのに対し ‘end’ は長く細いものを線として認識し、先端を線の終端としてとらえた表現である。サキは ‘end’ の意味に近いと言える。

(55) ペンサキ、筆サキ、糸サキ、肩サキ、指サキ、鼻サキ、刃サキ

太刀サキ、槍サキ、筒サキ、棒サキ、舳サキ

サキは典型的には長く細いものの先端を意味する。(55) の例が示すように、具体的なものの形は様々に異なる。また、ものの長さも、槍のように比較的長いものから、肩のようにそれほど長さが感じられないものまで様々である。しかし、日本語

の話者はそのような具体的なイメージの違いにもかかわらず、抽象化された「長さ」の端を表わすためにサキを用いている。しかも、単に、ある長さを持った線の端としてではなく、線の端に「まえ」を方向づけて認識している。

このことは、認知言語学ではイメージスキーマ¹⁶という用語を用いて説明される。イメージスキーマとは人間が外部世界を理解するために具体的な経験を基盤として形成する認知図式である。サキの考察には長く細い地形のイメージスキーマ¹⁷を用いることができる。

4.2.2 サキのイメージスキーマと「まえ」

本稿では、サキが空間的意味から時間的意味へ拡張していくことを可能にしている要因は「まえ」であると考え。サキはものの先端であり、ものの外部との境界でもある。しかし、サキと同様にものの外部との境界を意味する「端」や「縁」には、「まえ」が内在せず、時間的意味に拡張することはない。「縁」は「茶碗の縁」「縁側の縁」というように、特に方向性を持たない。一次元の線の「端」は二つあり、方向性について中立的である。しかし、サキは長く細い地形のイメージスキーマの一方の端を起点とし、他方の端を終点とする非対称的な方向認識が関わっている。語の空間的意味から時間的意味への拡張には、非対称的な方向認識が必要だと考える。

時間は一次元の線として認識される。サキは一次元の長く細い地形のイメージスキーマと関わっている。従って、イメージスキーマの先端（「まえ」）を時間軸上の認知主体の移動の方向の「まえ」と時間の見かけ上の動きの方向の「まえ」のどちらに一致させるかによって時間表現におけるサキの意味が決まる。

4.3 統合化された時間認識の型とサキのイメージスキーマ

3.3 で提案した時間認識の型に、サキのイメージスキーマを重ねてみよう。サキのイメージスキーマは起点と終点を持っている¹⁸ので、時間軸上のある時点に起点を置かなければならない。本稿では起点を置く時点をサキの参照点とする。つぎの例は、時間軸上で認知主体がいる時点を参照点として、イメージスキーマの先端を認

¹⁶[Lakoff 1980], [Lakoff 1987], [Lakoff 1993] 及び [山梨 1995] を参照。

¹⁷[Lakoff 1987, pp. 104–110], [山梨 1995, pp. 110–113] を参照。

¹⁸起点と終点が言語表現において明示されるとは限らない。

知主体の移動の方向に一致させている。サキは発話時を基準にして未来を表わす。

- (56) サキが短い。
- (57) 結婚はサキの話だ。
- (58) サキで苦労するよ。
- (59) 500 年サキの世界

時間軸上で認知主体のいる時点を参照点として、イメージスキーマの先端を時間の見かけ上の動きの方向に一致させることもできる。サキは発話時を基準にして過去を表わす。

- (60) サキの大戦
- (61) サキの話では、この計画は取りやめるとのことでしたが…
- (62) 先日、先週、先月、先年、先頃

サキに関わる長く細い地形のイメージスキーマが持つ長さは、起点から終点までの連続としてとらえることもできる。「サキの大戦」と言う場合、発話時及び発話者と過去の時点との間につながりが感じられる。「サキの大戦」と言って第一次世界大戦を意味することはできない。(62)の各語も同様に発話時を基準に過去を表わし、いずれの例も発話時と指示されている過去の時点との間に連続性がある。このことは、つぎの例と比べると明らかである。

- (63) その前日、その前週、その前月、その前年
- (64) *その先日、*その先週、*その先月、*その先年、*その先頃

(63)のようにマエの複合語は過去のある時点を参照点として用いることができる。しかし、サキの複合語は常に発話時が参照点であるため、(64)のように過去のある時点を参照点として用いることができない。

つぎに、時間軸上で認知主体のいる時点以外の任意の時点をサキの参照点とする場合を考察する。

- (65) ?¹⁹ 2000 年のサキに予定されている月への移住
- (66) 2000 年からサキに予定されている月への移住

¹⁹以下、? は容認度が低い例文であることを示す。

- (67) 2000 年よりサキに予定されている月への移住
- (68) ? 2000 年のサキに地球人口は急増する。
- (69) 2000 年からサキに地球人口は急増する。
- (70) 2000 年よりサキに地球人口は急増する。

(65) と (68) の例は、参照点が西暦 2000 年ではなく発話時であるという解釈もできるので、あいまいである。「から」や「より」などの起点を表わす格助詞を用いると、文の容認度が上がる。サキに関わる長く細い地形のイメージスキーマは、発話時以外の参照点を時間軸上の起点として格助詞を用いて明示することを要求していると言えよう。(65) から (70) までのいずれの例においても、サキの参照点が指示する方向は、認知主体が移動していく方向と一致して、未来方向を指している。また、これらの例におけるサキは時間軸上のある特定の時点を表わすのではなく、参照点を起点とする、ある長さ（連続性）を持つ時間を表わしている。この場合のサキが示す方向と連続性は (71) のように参照点を過去の時点に置いても変わらない。

- (71) バブルがはじけてからサキ、景気は悪くなるばかりだ。

サキは出来事の順序を表わす。

- (72) 食事よりサキにお風呂に入る。
- (73) 数学の宿題よりサキに国語の宿題を片づけた。
- (74) 公的資金を導入するより不良債権を回収する方がサキだ。

いずれの例も A と B の出来事をサキによって時間軸上に位置づけている。二つの出来事の時点を支きのイメージスキーマによって結び、一方の出来事の時点から他方の出来事の時点への方向性「まえ」を与えている。その方向性「まえ」は、時間軸上で時間の見かけ上の動きの方向としての「まえ」（過去方向）に重ねられている。

また、(72) から (74) のいずれの例においても格助詞「より」を「から」に置き換えることはできない。

- (75) *食事からサキにお風呂に入る。
- (76) *数学の宿題からサキに国語の宿題を片づけた。
- (77) *公的資金を導入するから不良債権を回収する方がサキだ。

以上のことから、つぎのようにまとめられる。サキの時間表現における用法は、サキが関わる長く細い地形のイメージスキーマを前節で述べた統合化された時間認識の型に重ねて用いることで説明できる。時間軸上で認知主体がいる時点を参照点とする場合、サキは認知主体から見て過去も未来も指すことができる。

イメージスキーマの「まえ」を認知主体の「まえ」方向と一致させると、サキは未来方向を指す。このとき格助詞「から」を用いることができ、時間の連続性が感じられる。イメージスキーマの「まえ」を時間の見かけ上の動きの方向と一致させると、サキは過去方向を指す。このとき、格助詞「より」は用いられるが、起点をより明確に示す「から」が用いられないことから、時間の連続性は背景化されていると考えられる。

しかし、すべてのサキの用法が説明されたわけではない。

(78) 太郎よりサキに花子が帰宅した。

(79) 家族より一足サキに帰京した。

(80) 太郎は同僚にサキ駆けて昇進した。

これらの例は複数の人間の移動に関わる表現である。(80) は実際の空間移動を伴わないが、ある地位への移動とみることができる。一方の人間は、すでに移動を終えて終点にいる。その人間の後方(起点)に移動しつつある別の人間がいる。前者は後者よりもサキの空間にあり、時間的にもサキに終点に到着した。後ろにいる人間が終点に到着するのはアトのことである。これらの例は空間表現と時間表現との中間にあると考えられる。このような場合は、サキの関わるイメージスキーマの「まえ」を統合化された時間認識の型にどのように方向づけるかはまだ明らかではない。

5 結 論

本稿では、「まえ」という特別な価値を持ち、「うしろ」に対して非対称的な方向の認識が、語の空間的意味から時間的意味への拡張において果たす役割を考察した。「まえ」は人間の視線が向かう方向であり、人間が移動する方向である。この点において「まえ」は「うしろ」とは異なる価値を持っている。即ち、人間にとって「まえ」は「うしろ」に対し非対称的な方向である。そして、人間が自らの「まえ」(未

来)に向かって移動し続けているという強い認識があるからこそ、時間の未来から過去への見かけ上の動きが感じられるのである。本稿では「まえ」という人間の生物学的特徴に基づく、「うしろ」に対して非対称的な方向認識が人間の時間認識を動機づけていることを明らかにし、より統合化された時間認識の型を提案した。

時間表現のマエが常に過去方向しか指さないのに対し、時間表現のサキは過去方向も未来方向も指すことができる。この違いの理由は、サキは長く細いもののイメージスキーマに関わるがゆえに、「まえ」という方向性を持つからだと考えられる。長く細いもののイメージスキーマの終点を、時間軸上のどちらの端に重ねるか、即ち、イメージスキーマの「まえ」を認知主体の「まえ」方向と時間の見かけ上の動きの「まえ」方向のどちらに一致させるかによって、サキの指す方向が変わる。

サキの考察を通して、時間軸の両端は等しい価値を持っているのではないことが明らかになった。時間軸の過去方向にも未来方向にもサキのイメージスキーマの「まえ」を一致させることは可能である。しかし、例文中の格助詞「より」と「から」を交換することができないことからわかるように、時間軸の過去方向にサキのイメージスキーマの「まえ」を一致させたときは、時間の連続性が感じられない。このことは、時間軸の過去方向が認知主体の移動の方向とは逆であり、認知主体が移動していく空間としての連続性がないことが理由であると考えられる。ただ、例外的に時間軸上で認知主体がいる時点、即ち、発話時にイメージスキーマの起点を置く場合は、過去方向を示すサキにも時間の連続性が感じられる。

今後の課題としては、空間表現と時間表現の中間にある用例の取扱いについて考察を進めなければならない。また、本稿では日本語を対象に人間の非対称的な方向認識がことばの意味の拡張に果たす役割を考察した。しかし、Hausa 語やロシア語の例が示すように、参照点に「まえ」をどのように投影するかは、ある言語を話す集団が共有する文化によって異なる。従って、本稿の結論が普遍的であるとは限らない。他言語との比較を通して、言語に反映される方向認識の普遍性と個別性の発見という研究を展開する必要があるだろう。

参考文献

- [Clark 1973] Clark, Herbert H. 1973. "Space, Time, Semantics and the Child" in Timothy E. Moore (ed.) *Cognitive Development and the Acquisition of Language*. New York: Academic Press, 27-63.
- [堂下 1991] Herskovits, Annette 著 堂下修司他 (訳) 1991. 『空間認知と言語理解』 オーム社.
- [Fillmore 1982] Fillmore, Charles J. 1982. "Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis" in R. J. Jarvella & W. Klein (eds.) *Speech, Place, and Action*. New York: John Wiley & Sons, 31-59.
- [Heine 1997] Heine, Bernd 1997. *Cognitive Foundations of Grammar*. New York: Oxford University Press, 35-65.
- [Herskovits 1986] Herskovits, Annette 1986. *Language and spatial cognition: an interdisciplinary study of the prepositions in English*. New York: Cambridge University Press.
- [Hill 1978] Hill, Clifford Alden 1978. "Linguistic Representation of Spatial and Temporal Orientation" in *Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, February 18-20, 1978*. Berkeley, California: Berkeley Linguistics Society, University of California, 524-538.
- [Hill 1982] Hill, Clifford Alden 1982. "Up/Down, Front/Back, Left/Right: A Contrastive Study of Hausa and English" in J. Weissenborn & W. Klein (eds.) *Here and There: Cross-linguistic Studies on Deixis and Demonstration*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 13-42.
- [池上 1993] Lakoff, George 著 池上嘉彦、河上誓作 他 (訳) 1993. 『認知意味論』 紀伊国屋書店.
- [河上 1996] 河上誓作 (編著) 1996. 『認知言語学の基礎』 研究社出版.
- [小泉 1990] 小泉 保 1990. 『言外の言語学：日本語語用論』 三省堂.

- [Koschmieder 1935] Koschmieder, Erwin 1935. "Zu den Grundfragen der Aspekttheorie." in Ferdinand Sommer & Albert Debrunner (eds.) *Indogermanische Forschungen* 53: Verlag Walter De Gruyter & Co.
- [Lakoff 1980] Lakoff, George & Mark Johnson 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- [Lakoff 1987] Lakoff, George 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- [Lakoff 1993] Lakoff, George 1993. "Contemporary theory of metaphor" in Andrew Ortony (ed.) *Metaphor and Thought: 2nd edn.* Cambridge: Cambridge University Press, 202-251.
- [植和 1997] 植和千春 1997. 「時間表現における『先』について」 *DYNAMIS* vol.1 京都大学大学院人間・環境学研究科 文化環境言語基礎論講座
- [瀬戸 1995] 瀬戸賢一 1995. 『空間のレトリック』海鳴社.
- [Talmy 1983] Talmy, Leonard 1983. "How Language Structures Space" in Pick, Herbert L. & Linda P. Acredolo (eds.) *Spatial Orientation*. New York: Plenum Press, 225-282.
- [Traugott 1978] Traugott, Elizabeth C. 1978. "On the Expression of Spatio-Temporal Relations in Language" in Greenberg, J. H. (ed.) *Universals of Human Language*. California: Stanford University Press, 369-400.
- [渡部 1986] Lakoff, George & Mark Johnson 著 渡部昇一他 (訳) 1986. 『レトリックと人生』大修館書店.
- [渡辺 1995] 渡辺 実 1995. 「所と時の指定に関わる語の幾つか —意味論的に—」『国語学』181, 18-29.
- [山田 1984] 山田小枝 1984. 『アスペクト論』三修社.
- [山梨 1995] 山梨正明 1995. 『認知文法論』ひつじ書房.

Summary

Asymmetry in Recognizing Direction and Multiplying Word Meaning—With Interest Centered on the Concept of Front/Forwards

Chiharu NARAWA

A human being uses the body as a reference point to specify space. The front of the body is the side where most of the sensory organs are. The space adjoining to this side of the body is referred to as being in front of him, and it is also the space he walks into. Therefore, the concept of FRONT/FORWARDS is more important for human beings than BACK(WARDS). There is asymmetry in recognizing the two directions.

Asymmetry in recognizing directions plays an important role in multiplying word meaning. This study examines Japanese spatial words, such as *mae* and *saki*, which also have temporal meaning. In spatial expressions, *mae* and *saki* mean 'front/forwards'. However, in temporal expressions, while *mae* indicates the direction towards the past on the time axis, *saki* indicates the directions of both the past and the future.

This is a very curious phenomenon because human beings seem to understand the concept of time using a spatial metaphor: time is a line on which one stands facing the future. Then, there are the following two problems: 1) Why does *mae*, which translates into English with words like front/forwards/before, indicate the direction of the past, i.e. that which is behind the man facing the future on the time line? 2) Why does *saki* indicate both the past and the future directions while indicating only the direction forward of a reference point in spatial expressions? This study proposes an improved model of the spatial metaphor used for under-

standing the concept of time. It then tries to resolve the two questions using the proposed model and the image-schema theory in cognitive linguistics.

Through the study of the use of *mae* and *saki*, this study shows how asymmetry in recognizing directions, along with the strong human feeling of continuous movement towards the future, play an important role in multiplying Japanese word meaning.